

□海外文献紹介□

ヨーロッパにおける腹腔鏡下胆嚢摘出術の経験

The European experience with laparoscopic cholecystectomy: *Cuschieri A, et al* (Am J Surg 161: 385-387, 1991)

腹腔鏡下胆嚢摘術は胆石症治療の一里塚であるばかりでなく、手術野を損なうことなく切開創を最少にすることを旨とした革命的な外科治療法である。本法を行っているヨーロッパ7施設の20名の外科医にアンケート調査を行った。

1,236例(全例有症状)の腹腔鏡下胆嚢摘術が施行され、1,191例(96.4%)で成功している。開腹胆嚢摘術に変更を余儀なくされたものは45例(3.6%)で、手技的困難(萎縮胆嚢、

胆嚢管短縮など)によるものが33例、偶発症11例(胆嚢動脈出血8例、胆管損傷2例、化膿した胆嚢の破裂1例)、器具の故障1例であった。

全員が禁忌と考えているのは重篤な急性胆嚢炎、黄疸、門脈圧亢進、妊娠例で、75%のものが急性膵炎、著しい肥満も禁忌としている。

平均手術時間は50分(30~90分)であった。術中胆管造影は25%の術者が全例に、他は必要に応じて行うとし、その際には20分余計にかかっている。また、194例(16%)で胆嚢床を剝離中に胆嚢の穿孔があった。死亡例はない。術後合併症は20例(1.6%)に認められ、うち9例(0.7%、出血3例、CBD損傷・胆汁性腹膜炎各2例、敗血症・肝被膜

下血腫各1例)では、開腹が必要であった。小さな合併症として器械挿入部の皮下出血6例、胆嚢を取り出した部位の化膿が5例あり、後者は退院2~4週目に発生した。

平均在院日数は3日(1~27日)、仕事に戻ったのは退院後平均11日(7~42日)、腹痛のため再入院した6例はいずれも積極的治療を要さなかった。腹腔鏡下胆嚢摘術について1年以上の経験を持つ4施設では、胆嚢疾患の97%を腹腔鏡的アプローチで治療している。本法の安全性は十分確立されており、入院期間の短縮によって1人当たり100ポンドの費用が節約された。

(関東通信病院消化器内科

富本茂裕 抄)